



立野信之

赤と黒

新潮社版

黒 と 赤

昭和三十四年一月二十六日 印刷
昭和三十四年一月三十日 発行

定価二八〇円
地方売価二九〇円

著 者 立 野 信 之

発 行 者 佐 藤 亮 一

東京都新宿区矢来町七一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(34)代表七一―九
振替 東京 八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求
の書店にてお取替えいたします。

目次

赤旗事件	三
囚人馬車	二四
奇々怪々	四一
満月	五八
炬燵談義	七六
同棲	八三
拘引	九〇
藥研	九六

大逆事件……………	三	籤……………	二六	逃避行……………	二七	脱落者……………	二八
-----------	---	--------	----	----------	----	----------	----

装帧
岡村夫二

赤

と

黒

赤 旗 事 件

一

明治四十一年六月十九日の朝である。

上野駅構内に、一見して社会主義者とわかる一団の人たちが数旆の赤旗を押立てて、にぎやかに談笑しながら陣取って居た。人数はおよそ七十名ばかりで、中には数名の若い女性の姿も見うけられた。赤旗には「社会主義」とか、「革命」とか、「山口君歓迎」とかいう文字が大書してある。一年二カ月の刑期をおわって仙台監獄を放免になった孤剣山口義三を出迎える人たちであつた。

山口孤剣は元「平民新聞」記者で、年は二十五歳。先年——日露戦争の真最中、同志の小田頼造青年とともに赤い箱車をひいて、東海道や山陽方面を社会主義の伝道行商に従事したことで、社会主義者のあいだではかなり有名である。堺枯川の言葉を借りると「多才多能、純真激情」の青年で、週刊「平民新聞」の後身である機関誌「光」の号外にのせ

た「貧富の戦争」の記事が当局の忌諱に触れて軽禁錮一カ月半、別に同誌にのつた大杉栄の執筆にかかる「新兵諸君に与う」で発行責任者としての罪を問われて軽禁錮八カ月、それに日刊「平民新聞」に書いた「青年に訴う」という記事で軽禁錮二カ月等——通算一年二カ月半の刑に処せられていたのだ。

九時三十分——仙台からの汽車は、重々しい地響きをたてて構内に入ってきた。

七十余人が固唾をのんで凝視する中を、一般乗客にまじって、山口が元氣な足取りで列車から降りてきた。洋服姿である。一年二カ月余にわたる禁錮で、さすがに顔は青白い。

「——降りた、降りた！」

「——割合、元氣そうじゃないか」

人々の間からざわめきが始まった。と思うとすぐ、

「——山口孤剣君、ばんざあい！」

と、一きわ高く声があがった。

「——ばんざあい！」

「——ばんざあい！」

声々は構内にどよめきわたった。

その中を山口は面映ゆげに歩いてきたが、改札口を出ると、たちまち出迎人の中に巻きこまれてしまった。

「——おい、元氣か」

「——おめでとう！」

山口が誰彼となく握手をかわしていると、誰がうたい出すともなく社会主義の歌がわき起った。

富の鎖を解き捨てて

自由の国に入るは今

正しき清き美しき

友よ、手をとり起つは今

一団の人々はうたいながら、ゾロゾロと駅の構内を出た。

わが身は常に大道の

ソシアリズムにささげつつ

励むは近き今日の業^{わざ}

望むは遠き世の光

行列は赤旗を六月の朝風になびかせながら、上野山下にさしかかった。

すると山下の巡査派出所にあらはじめ待機していた十数人の巡査がバラバラとび出して、行列の行手をふさいだ。

「——旗を巻け！」

「——旗を振ってはいかん！」

巡査たちは、口々に怒鳴った。

「——旗は自由だ！」

「——おれたちのシンボルだ！」

「——巻く必要はない！」

一同は、怒鳴り返した。

「——何でもいいから、巻け！」

「——巻かんと没収するぞ！」

巡査たちは、旗手を取りかこんで旗をうばい取ろうとする。旗手とその周囲の同志たちは、旗を取られまいとする。たちまち、そこに乱闘がはじまった。

「革命」と大書した赤旗をかついでいた年若な荒畑寒村は、数名の巡査に取りかこまれ、力ずくで派出所へ押しこめられた。

「——渡せ！」

「——渡さん！」

荒畑が巡査たちの腕の中で必死に旗竿にしがみついていると、そこへ同志たちがドッと押寄せてきた。たちまち殴る蹴るの乱闘が荒畑の周囲ではじまった。と思うと、強い力で引張られるままに、荒畑は旗竿を抱いて外へ飛び出した。同志たちが旗ぐるみ荒畑を奪還したのである。

それと知った荒畑は、旗を小脇に抱えて、一目散に広小路を横切り、切通し坂に向かって駆け出した。数名の仲間が一緒だった。

広小路ではまだそこちこちに乱闘が演ぜられていたので、巡査たちはそっちの方に気を取られて、荒畑らのあとを追って来なかった。

それに切通しをのぼってしまえば本郷で、もはや下谷署の管轄ではない。

荒畑らは坂の中途に立ちどまって、

「——やれ、やれ！」

と、胸なでおろした。

するとその時、

「——エイホッ、エイホッ！」

という懸け声とともに、二人曳きの人力車が坂をあがってきた。

見ると車上の人は、山口孤剣であった。——後でわかったのだが、時ならぬ乱闘さわぎが起ったので、西川光次郎が気をきかせて、山口を人力車に乗せたのだった。

「——よかった、よかった……万歳！」

と、荒畑らは思わず手を叩いて、人力車を迎えた。

山口ははにかみ笑いを青白い顔一杯にみなぎらせて、

「やあ、済まん、一足お先に失敬する」

「落着き先はどこだ？」

と、誰かがきいた。

山口はふり向きざま、

「——先ず本郷の西川君のところに厄介になる……！」

そういう残して、去って行った。

西川光次郎は、多年の同志であり先輩である幸徳秋水や堺利彦一派と別れて、いまは本郷一丁目の本郷座前に東京社会新聞社を創設して一人立て籠っている。幸徳や堺らのいわゆる柏木派に対して本郷派をもって自任し、犬猿もただならざる有様である。

西川が幸徳や堺一派と袂を分ったのは、一昨年来国から

帰朝した幸徳秋水が、神田の錦輝館で行われた社会党の演説会で、「世界革命運動の潮流」と題して、無政府主義を標榜する一大演説を試みたのにはじまる。

つづいて幸徳は日刊平民新聞に、「予が思想の変化」と題して一大論文を発表した。

その論文は、

「——余はかつてドイツの社会主義もしくはその流れを汲むところの先輩の説のみをきいて、余りに投票と議会との効力に重きを置いてきた。議会で多数をさえ占めれば、議会の決議で社会主義の実行ができると考えてきた。なるほど、労働者の団結の急務も認めてはいたが、しかし第一着は何といつても普通選挙の外はないと考えていたのであるが、これは今日よく考えて見るとはなはだ幼稚な単純な考えであつた」

と、冒頭して、

「——余は正直に告白する。かの普通選挙やこの議会政策では、真個の社会的革命をなし遂げることは到底できぬ。社会主義の目的を達するには、一に團結せる労働者の直接行動による外はない。余が現時の思想は実にかくの如くである」

と、無政府主義による直接行動を高唱したのであった。

この論文が出たのは昨年の二月で、その月の十七日には錦輝館で社会党の第二回大会が予定されて居り、そこでは普通選挙運動に対する運動方針が相当問題になることが予想されていた際だったので、普通選挙や議会政策を否定する幸徳の論文は、同志間に大きな衝撃を与えた。

これに対して盟友堺利彦は、二月十日発行の平民新聞第二十一号に「社会党の運動方針」と題して、飛躍的な幸徳の論旨を批判するとともに、議会政策の必要を説いた。要するに議会政策と直接行動の併用論である。

すると、それにつづいて米国大学出身で英語の私塾をひらいている田添鉄二が、二月十四日と十五日の両日にわたって平民新聞に「議会政策論」を発表して、堺の所説に賛意を表するとともに、議会政策の必要を痛論した。要するに田添は、直接行動は必ずしも否定はしないが、議会政策を用いることがより効果的であり、より安全な方法だといふのである。

こうして迎えた社会党第二回大会では、当然の成り行きとして、幸徳秋水と田添鉄二の間に、火を噴くような論戦が行われた。田添は髪も髭も黒くて長く、そのうえ長身

で、堂々たる風采から発する弁舌はきわめて論理的で、一つ一つの論理を積み重ねて行くところは宏壮な建築を見るような感じを与えた。それに対する幸徳の演説は、界の表現を借りると眼は電火を放ち、舌は火焰を吐くがごとき雄弁をふるい、一時間にわたって言々風霜をさしはさみ、句句霹靂をとばす概があった。

ところが、幸徳の演説と第二回大会の記事を載せた二月十九日発行の平民新聞第二十八号が、安寧秩序紊乱のゆえをもって発売を禁止されると同時に告発され、越えて二十二日には内務大臣名をもつて日本社会党は安寧秩序に害あるものとして、結社を禁止された。第一次桂内閣にかわつた西園寺内閣は、最初は社会主義運動に寛大の方針をもつてのぞんでゐるかに見えたが、ついに反動の牙をむき出して弾圧方針に変つたのである。陸軍省あたりの圧迫によるものらしかった。

朝憲紊乱に問われた平民新聞の裁判は、発行兼編集人の石川三四郎が禁錮四カ月を言い渡された。また三月二十七日発行の平民新聞第五十九号にのせた山口孤劍の論説「父母を蹴れ」が告発され、平民新聞は発行禁止、執筆者の山口は禁錮三カ月、発行兼編集人の石川三四郎は禁錮六カ月

を言い渡された。

このため日刊平民新聞は、第七十五号をもってついに廃刊の宣言をかかげるにいたつた。そしてこの前後には、旧日本社会党の幹部の大部分は入獄か、入獄直前の運命に晒されていたのである。

五月になると入獄中の西川光次郎が保釈で出てきたが、西川は幸徳らの言動に慄らず、さきごろ米国から帰朝していた片山潜と提携して別に週刊「社会新聞」を発行し、これには幸徳の論敵田添鉄二が主として執筆した。

これと前後して、元岡山県の属官で平民社の社員であつた森近運平が宮武外骨に聘せられて大阪に赴き、「大阪平民新聞」を編集発行することになり、これには幸徳秋水、堺利彦、山川均らが主として執筆した。

このため社会主義者の機関紙は、東西二つに分れた観を呈した。いわゆる軟派の片山、西川、田添らは、新たに社会主義同志会を組織して日曜日ごとに研究会を開けば、一方硬派と称せられる幸徳、山川、堺らは、毎週金曜講習会を開催するといった塩梅で、硬軟両派はことごとに対立し、分裂の溝を次第に深めて行つたのである。

そのうちに年が明けるとともに、西川らの社会主義同志

会の連中は、二月十六日の夜西川方に会合して、突如として片山潜を除名してしまった。片山の性格、精神、行動中、社会主義者としてあるまじき点が少くない、というのがその理由であつた。

その後、社会新聞は片山、田添らによつて継続され、西川は同志の赤羽一と月三回発行の「東京社会新聞」を発行するに至つた。

一方、大阪平民新聞の方は、六月の満一周年を期して東京に進出して発行回数もふやすことを予告していたが、次号で突如として休刊を宣言し、事実上廃刊せざるを得ない状態に立ち至つた。

そういう矢先に、山口孤剣の出獄を迎えたのである。

山口は硬軟両派から気受けがよいが、どつちかというとき徳や堺らの直系分子である。だが、西川とは週刊平民新聞時代から特別に仲がよいので、そのために山口は一時西川方に身を寄せようというのであろうが、西川が強引に引張つた、という節も見られなくはない。

広小路で乱闘を演じていた連中が、三々五々引揚げてきた。いずれも興奮し、勝ち誇つた顔つきである。

「——おい、山口はどうした？」

と、後から引揚げてきた連中がたずねた。

「——西川の家へ行つた」

と、誰かが答えた。

「——じゃ、われわれも行こう」

一同は、ゾロゾロと連立つて、本郷座の方に向かった。本郷座と道路をへだてて向かい合つた小さな二階家の入口に、「東京社会新聞社」というまだ真新しい看板がかつてゐる。西川一派の牙城である。

一同はその前に一塊りになつて立ちならぶと、

「——山口孤剣君、ばんざあい！」

「——ばんざあい！」

「——ばんざあい！」

あとは拍手をして、二階の窓から顔を出した山口に手をつりふり解散した。

疾風はやてのような乱闘事件であつた。

二

その翌々日。——

柏木の堺利彦宅に大杉栄や荒畑寒村らの若手連中が集まつて、乱闘事件の話に花を咲かせていると、そこへ石川三

四郎と齋藤兼次郎とが連立ってやってきた。

石川は三十二歳、かつてフランスに留学したことのあるスマートな優男だが、齋藤はそれよりもはるか年上の四十六歳、禿頭で髯を生やした恰好がクロボトキンに似ているところからクロボトキンとあだ名されていた。二人とも元平民社員であるが、いまは硬軟両派から超然として、どっちつかずの立場をとっている。

「やあ、お揃いで、何だね？」

堺が鉄ぶちの眼鏡を光らせて、二人を迎え入れた。

「山口君の歓迎会のことです。やってきたんだが……」

石川が座につくなりそう冒頭して、

「山口君の歓迎会は、このさい両派合同で開いたらどうか。両方で別々に開くのも費用損だし、ことに山口君は分派以前から入獄しているのだから、別々に開かれても、当人も疲れていることだし、迷惑だろう。また両派とも、いままでに多少の行違ひはあったとしても、長年の同志であったことだし、山口の歓迎会ぐらいは合同でやれそうなものじゃないか。それに、これを機会に双方の感情の融和ができれば、なお結構じゃないか……君らが賛成してくれれば、これから本郷団へ交渉する」

という話だった。

「もちろん賛成だ、本郷団さえ異存がなければね」

と、堺は相好をくずしていった。

発起人には石川、齋藤の外に人力車夫の野沢重吉、金物職の親方の幸内久太郎の四人がなる、という。いずれも年配者で、硬軟双方に受けのよい顔ぶれであった。

堺らは、その発起人の顔ぶれにも異存はなかった。

石川らが帰ったあと、堺は大杉や荒畑らをかえり見て、

「まあ山口君の歓迎会を機縁に、双方の感情が少しでも融和できれば、それに越したことはないがね……」

と、いった。

それに西川一派と一番尖鋭的に、対立している幸徳秋水が、現在病氣静養のために家族をあげて郷里の土佐に帰省中なので、幸徳の留守中に双方の融和ができれば、あとは何とか丸く納めることができよう、というのが堺の漠然たる考えでもあった。

だが、若くて血の氣の多い大杉や荒畑らは、そうは考えない。幸徳の直接行動論を純粹な理論として真向から受入れている二人は、西川一派の議会政策論が齒がゆくてならない。だから、何とかしてこの際自派の勢力を伸張するた

めに、一暴れしたい気持が心中に疼いていた。前々日、警官隊との乱闘に勝利を得た興奮も残っていて、もう一暴れしたくて仕方がなかったのだ。

堺宅からの帰途、荒畑は誘われるままに牛込田町の大杉の家に立ち寄った。大杉は一昨年電車賃値上げ反対闘争で兇徒衆集罪に問われ、東京監獄と呼ばれている市ガ谷の東京拘留監に収監されたが、保釈出獄すると、すぐ堺利彦の先夫人道子の妹の保子と結婚して、そこに世帯をもっていた。

大杉は荒畑より三つ年長で二十四歳、保子は大杉より十歳年上の三十四歳である。保子は、はじめは平民社員で小学校教員あがりの深尾留に心をひかれていたのだが、監獄から出てきた大杉が自分の浴衣の裾に火をつけて強引に迫ったために、ついにその熱情にほだされて大杉のものになった、とは同志間のもっぱらな噂であった。

だが、その保子もいまはもうすっかり大杉の細君に納まつて、荒畑を見ると、

「あら、いらっしやい」

と、若やいだ声をあげた。

大杉は机を一つ置いただけの六畳の書齋に荒畑を通すと、大きな眼玉をグルッとむいて、

「き、君……」

と、どもりながら言い出した。

「さッ、堺さんはあ言ったが、とッ、とても、そッ、双方の感情の融和なんかできるもんじやない。分裂するものは、はッ、はつきりと分裂しちゃった方がいいんだ……きッ、君はそう思わないか」

「ほくもそう思う。だから、二十二日の山口君の歓迎会には、少しあばれてやろうと思うんだが、どうだろう？」

荒畑はいたずらっぽく眼をかがやかせた。

「あばれるって、どうするんだ？」

「おとといの赤旗は、乱闘騒ぎでスタスタに破れたから、新たに赤旗を作って、会場に押立てて騒いでやろう……要するに、こっちの氣勢をあげるのさ」

「旗には、なッ、何と書く？」

「革命とでも、無政府共産とでも書くさ」

「よかろう」

と、大杉も大きな眼をかがやかして、同意した。

大杉は電車事件以来、直接行動派の中では、その戦闘的な風貌とともに頭角をあらわしていたのである。

その日、荒畑は大杉宅からの帰りがけに三尺角の赤い布

片を二枚と白いテープとを買って、柏木の間借り先へ帰った。

荒畑の部屋には、かつての日刊平民新聞社の編集室給仕で、大阪平民新聞の事務員だった百瀬晋が同宿していた。

百瀬は荒畑が赤い布片を買ってきたのを見ると、

「また旗を作るのかね？」

と、眼を丸くした。百瀬も一昨日の乱闘組の一人であった。

「あさつての山口君の歓迎会に使うんだ……」

荒畑はそういつて、一人ニヤニヤ笑った。

翌日、下宿の主婦にテープの縫いつけを頼むと、主婦は、

「へえ、妙な旗ですねえ」

と、あつけに取られた顔をしたが、それでも縫いつけを快く引受けてくれた。

下宿の主婦は、荒畑が白いテープを切って置きならべた通りに、ミシンを踏んだ。一枚は「無政府」、他の一枚には「無政府共産」と、大文字が赤地に白く浮きでた。主婦は布地のふちをかがり、竿に結ぶ紐まできちんとつけてくれた。さすがは女手で、相当な出来ばえである。

「一体、これはどういう意味なんですか」

と、主婦は自分の製作品をうちながめて、最後にきいた。

「世の中がよくなるように、という御呪いですよ」

と、荒畑は笑ってごま化した。

近所の竹屋から手頃の竹竿を二本買ってくると、それでもうすっかり準備はととのつた。明日、西川らの軟派に對して思い切り、示威運動を示してやるだけである。

そう思うと、荒畑の若い血が躍って、とても間借りの部屋などにじっとくすぶっている気になれなかった。それに騒ぎが大きくなれば警官隊が取締りに駆けつけるだろうから、ひよつとしたらその騒擾にまきこまれて、今度はやられるかも知れない、という思いも内にひそんでいた。そのためにも、荒畑は余計じつとして居られなかったのである。

「おい、百瀬……英気を養いに、久しぶりで浅草へ行こう」

と、荒畑はとつぜん誘った。

「浅草？ それは結構だが、金はあるかね？」

「金はある……」

と、荒畑は懷中を叩いてみせた。

事実、荒畑の懷中には、ついさきごろ「大阪日報」の記者をやめて上京する際にもらった退職金や餞別が、まだ幾らか残っていたのだ。

「よし、そんなら行こう」

と、百瀬は元氣に応じた。

二人は電車で上野へ出ると、天氣もよかったのでブラブラ歩いて、浅草公園に入った。

まず電気館で西洋の活劇を観て、それから晴れた空に灰色の憂愁な姿をそそり立てている通称十二階の凌雲閣にのぼって、そのてっぺんから東京市街を俯瞰した。

銀座や日比谷辺には赤煉瓦や木造の洋館が点在しているが、あとはひしゃげた黒い瓦屋根ばかりがびっしりとならんでいて、白い道路路上を電車が虫けらのようにノロノロ走っていたり、人が蟻のように続いているだけだけの平凡な眺めである。ただ東の方に東京湾がしらじらとひらけ、海の向うに房総の低い山々が霞んで見えるのが、景観らしい景観である。反対側の西に眼を転ずると、秩父の山々がこれも霞んで見え、そのうしろに富士山が一ト際高くぬッとそびえ立っているのが、くっきりと望見された。

眼を市街に戻すと、堺の住んでいる柏木あたりの手前に、細い川の流れが光って見える。石神井川の支流である。その左手の牛込寄りにも一本の川が光って見えかくれしているが、それは川ではなくて、濠でもあろうか。

だとすると、荒畑の愛人である管野須賀子が妹と一緒に住んで居る市ガ谷の家は、どの辺になるだろう？ 彼女は肺を病んで、去年はしばらく熱海で静養していたのだが、そういつまでも遊んでも居られなかったので、夏に帰京すると、勤め先の「毎日電報社」に、月給の縁が切れない程度に出勤して居る。だが、その彼女とは、荒畑はこしはらく会っていない。大阪で人からきかされた彼女の男出入りの遍歴が、まだ二十一歳の純真な青年である荒畑の胸にこたえ、会う気がしなかったのである。

管野須賀子は、荒畑より六つ年上で二十七歳の女ざかりである。

荒畑が須賀子と識つたのは、一昨年——まだ十九歳の正月、堺利彦の幹旋で紀州田辺の「牟婁新報」に記者として赴任していた際である。

牟婁新報の社長兼主筆は毛利柴庵もろりさいあんという真言宗の住職で、平民社の運動の同情者であった。月十回発行ののんき